

縄張り意識による公共財の効率的共同利用
～サーフィンにみるコモンズの悲劇回避～

内野翔太
大木翼

目次

- 1 はじめに
 - 1.1 研究背景
 - 1.2 研究目的
- 2 先行研究
- 3 調査対象と研究方法
- 4 調査結果
 - 4.1 サーファーのいる海・いない海
 - 4.2 コモンズの最適利用を実現する 3 つのレバー
- 5 事例分析
 - 5.1 サーファーコミュニティの特徴と維持・拡大
 - 5.1.1 コミュニティ形成における制度
 - 5.1.2 コミュニティへの参加とネットワーキング
 - 5.1.3 コミュニティの象徴
 - 5.2 縄張り意識の生成・正当性
 - 5.2.1 縄張り意識の生成
 - 5.2.2 縄張り意識が認められる理由
 - 5.3 縄張り意識とコミュニティによる共同管理と共同分配
 - 5.3.1 海岸の共同管理
 - 5.3.2 波の共同分配
 - 5.4 制裁
 - 5.4.1 顧客コミュニティにおける制裁
 - 5.4.2 地域コミュニティにおける制裁
- 6 結語
 - 6.1 考察
 - 6.2 インプリケーションと今後の研究課題
- 7 参考文献・参考 URL

要旨

本稿は、千葉北と湘南という関東 2 大サーフスポットにおけるサーファーコミュニティを調査対象とし、フィールドワークを行うことで共有地、つまりコモンズである海の共同管理と波の共同分配のメカニズムを明らかにするものである。

研究方法としては、調査対象が文献や先行研究がほぼ存在しない未開拓であったため、サーファーの方々やお店のスタッフの方に直接インタビューを行うと同時に、筆者自らがサーフィンを始めることで参与観察の方法をとった。

調査を進めていくと、サーフィンというスポーツにおいて、ローカリズムという独特の文化が非常に重要であることがわかった。そこで、我々はローカリズムと呼ばれる、縄張り意識の働きに注目しながら調査を進めていった。すると、縄張り意識が、共有地である海に対する愛着を生み、効率的な共同利用を促していることが明らかになった。それと同時に、顧客コミュニティ内部での波の分配のルールが存在し、さらにはそれらがコミュニティ内外のフリーライダーへの制裁機能によって初めて保たれているという結論に至った。

以上の調査から、我々はコモンズの共同利用に際して、縄張り意識、コミュニティ、そして制裁機能の 3 つのレバーが重要な役割を果たしていることを導き出した。

筆者の知る限りでは、サーファーコミュニティを題材にした研究はどの学問の分野においても、未だになされておらず、それだけにフィールドワークを通じた本研究には様々な新しい示唆が含まれている。一般常識では考えにくい出来事が通用してしまうサーフィンの世界だからこそ、今までのコモンズ研究に新たな貢献が出来ると信じる。

1. はじめに

1.1. 研究背景

入会林野¹^{いりあい}という制度をご存じだろうか。「入会」とは、ある一定の領域（その多くが生活圏を単位として発展した自然村）の地域住民が、自らの生活を支えるために山・川・土地を共同で管理する制度・組織のことである。そのように共同で入会うことのできる権利を入会権という。この総有権の及ぶ範囲を入会地という。（川島 1968）この「入会」が働いている林野を入会林野と呼ぶのである。そこでは、今日の構造的な林業不況のもとにおいてさえ、みごとな美林を形成して地域振興や環境保全に貢献しているものもある。（室田・三俣 2004）

以上のような事例は極めて希少であり、近年の環境問題が悪化し続けることからわかるように、公共財（コモンズ）の分配・管理は大きな問題が付きまとう。それは個と全体の不両立問題に帰結する。環境問題を例にするとすれば、いくらある一個人が地域保全に対して熱心に取り組んだとしても、その他大勢、もしくは一部の人間が利己的な行動をとったとすれば、熱心な一個人の取り組みは水の泡となってしまうのである。この問題を打開することは近年の環境問題などにとっても大きな貢献を示すであろう。

1.2. 研究目的

本稿の目的は、サーファーコミュニティの調査を通して、「海」というコモンズと人々、さらには人と人との関係性の中に埋め込まれた環境保全と資源分配のノウハウや方式を明らかにすること、そしてそれを個と全体の不両立問題を解決し、コモンズの最適利用を支える 3 つのレバーという形で集約させることで汎用性を持たせることである。

またそれら 3 つのレバーを機能させているサーファーのコミュニティマネジメントについて着目し、それぞれがどのような制度や文化に埋め込まれているか明らかにすることも重要視したい。それは、それらを見ることで 3

¹ 日本各地にみられるが、愛媛県、福島県等が有名である。

つのレバーについてのより深い理解が実現すると考えるからである。

2. 先行研究

公共財や共有地における個と全体の不両立問題は、さまざまな形で研究されてきた。その中でもハーディンがこの分野の発展に与えた影響は大きい。彼は公共財や共有地を「コモンズ (Commons)」とおき、その問題の本質が「オープンアクセス (Open Access)」にあると唱えた。(Hardin 1968)つまり、外部的な存在である利己的主義者がオープンアクセス性におけるコモンズ(公共財、共有地)に対して、合理的行動を取ることが問題というのである。

この問題に対する解決法として、まず挙げられたのがハーディン自身による政府提案(社会主義)的解決法だ。(Hardin 1978)これは、政府が第三者として介入することで、規制や管理を行い、共同利用可能な資源の分配や管理を行う方法である。

次に、パークスによって唱えられた所有権の割り当てによる解決法として挙げられる。(Berkes 1985)これは、所有の帰属が不明なコモンズに対して、一定の所有権を定めることで所有者の意識を高めるという解決法である。また、これらの所有権は必ずしも空間的な権利に限らず、時間的な権利もこれに該当する。

最後に、オストロムによって確立された解決法が、コミュニティマネジメントによるものだ。(Ostrom 1990)これは、共同利用可能資源の利用者が参加の下で相互義務契約を結んでルールを形成し、行動のモニター、違反者へのサンクションを実行して、フリーライダーを抑止しようという考え方である。

本稿においてはこれらの解決法について強く意識をおき、調査を進めていった。

3. 調査対象と研究方法

本稿では、地元のサーファーによる環境保全が実践されており、さらにサーフィンにとって必要不可欠な波の分配が、サーファーによって混雑した海の中でも優れた形で行われている場所を調査対象として選んだ。そのため、主に千

葉県の千葉北エリアと神奈川県湘南の鵠沼海岸のサーフショップのスタッフの方々、またサーフショップの持つコミュニティに所属するサーファーの方々へのインタビューを中心に調査行った。さらには著者自らがサーフィンを始め、初心者としてこれらのエリアの多くのショップに出向き、また様々なサーファーコミュニティの方々と交流する形での参与観察の形式をとった²。

これらの調査では、海というコモンズの環境を守るため、そして波というサーファーにとって有限な資源を上手に分配するために、サーファーコミュニティが恣意的に、もしくは自然発生的に生み出していったルールや慣行に着目することで、どのようにコモンズの悲劇を回避しているかを明らかにしていく。

また、今回音声記録を取る機会は得られなかったため、フィールドワーク中に記録したメモをもとにした。

4. 調査結果

4.1. サーファーのいる海・いない海

神奈川県湘南鵠沼海岸。早稲田から一時間半電車で揺られ、駅に着くとすぐに自分がサーフタウン³にやってきたことを実感する。ゴミ一つない美しい砂浜にボードを抱えて歩く人、海岸に並ぶ数多くのサーフショップ、商店の入口に置かれたサーフボードを立てかけておけるロッカー。町を歩いているだけで自分もサーファーになった気分になれるであろう。休日にはサーフィンの大会が開かれていることも多い。実はサーフィンの大会はサーフィンを知らなくても楽しめる。砂浜に響く歌や音楽に合わせて踊り、小腹がすいたら相模湾のアジ井なんていかがだろうか。このように日本随一のサーフタウンといわれる鵠沼海岸はサーフィンを中心に環境保全、地域振興が行われ、毎年たくさんのサーファーや海水浴客が訪れる。

逆に、千葉県のとある町にはサーフィンをする人が全くいない、いわゆる自然のままの海岸がある。手つかずの海と言えは聞こえは良いが、その現状は想像とはかけ離れてしまっている。砂浜には異国からペットボトルや瓶が

² 2008年7月よりサーフィンを始め、2010年現在まで。湘南・千葉北エリアを中心に年間二十回以上通う。

³ サーフィンを中心に栄えた町。世界的にはオーストラリアのゴールドコーストやハワイのノースショア等が有名である。

打ち上げられ⁴、雑草が生い茂る。一步陸にあがっても、塩害⁵で住みにくい海の近くにはまばらに家が建つ程度で寂しい街並みが続く。夏になるとその砂浜をどうにか整備し、海の家を建て、海水浴場として営業を行うが海水浴に訪れる客は僅かだ。

サーフィンは夏だけのスポーツだと思われる方も多いと思うがそうではない。真冬の鵜沼海岸にも夏程とは言わないが百人程のサーファーが海に入っている。この点で真夏の一月半程で訪れる人が全くいなくなる海水浴とは大きく異なる。鵜沼海岸の事例でもわかるようにサーファーが継続的にやってくることは地域振興にとって大きな貢献をするのである。

しかし、サーファーが継続的にやってくることだけが、環境保全、地域振興に大きな貢献をするわけではない。今では日本随一のサーフタウンと言われる鵜沼海岸には、かつてひどく荒れた時代があった。ここは、筆者ではなく湘南にサーフショップを構えて五十年近くになるサーフショップコーストラインのオーナー、小田さんの話を引用する。

1960 年代日本ではサーフィングブームが到来しました。若者たちはこぞってサーフボードを買い、湘南へとやって来ましたが、海では多くのトラブルが起きました。波の取り合いが原因で喧嘩が起きたり、ポイ捨てされた煙草の吸殻や食べかすが本来美しいはずの砂浜を汚したり、違法駐車が盛んにおこなわれたり。さらにはその違法駐車に腹を立てた者がその車のタイヤをパンクさせて問題をより大きくしてしまったこともありましたね。近隣の住民からしてみればサーファー達は厄介者だったと思います。そうしているうちにだんだんと海に来る人も減ってきてしまいました。どうにかしなくてはいけないってその時はしきりに思っていましたね。

(コーストライン、小田さん)

⁴ 日本の海岸には異国から潮流によってゴミが流れ着き、近年では大きな環境問題となっている。

⁵ 海沿いの地域で多く発生する、塩分によって農作物その他の植物や電気設備、鉄、コンクリート構造の施設などが害を受ける現象のこと。

このように、サーファーが年間を通して訪れることは、地域振興や環境保全に対して貢献をし得るが、同時にそれらを後退させる危険をも孕んでいるといえる。

4.2. コモンズの最適利用を実現する3つのレバー

サーファーが年間を通して訪れることが、地域振興や環境保全に貢献をするためには何が必要となるだろうか。我々は今回の調査を通して、それを縄張り意識、コミュニティ、制裁であると結論付け、それを3つのレバーと呼ぶことにした。ここではそれぞれについてどのようなものであるか述べていく。

第一のレバーは「縄張り意識」である。本稿では、サーファーコミュニティの行う私有化制度を縄張り化という言葉に置き換えた。それは、サーファーによるコモンズの私有化のプロセスが、自然界における動物の縄張り行動に類似している点、また私有化がローカリズムという自然発生的な権力主張によって表層化する点に由来する。

元来、縄張りという言葉は、昔の日本人が土地の所有権を主張するために縄を張ったことに由来する。しかし、現在の学問においては、縄張り意識とは自然界における動物行動学の分野の言葉である。ある種の魚に関しては、水草を使って巣を作り、それを自身の縄張りとする。そこで産卵を行い、さらには卵の孵化を待つ。その間、外部からの侵入に対しては攻撃を行い排除しようとする。このような行動が典型的な縄張り行動とされる。人間界で例えると、やくざの支配領域がこれにあたる。地域間、組織間、分野間でそれぞれの関係領域が互いにぶつかったり、重なったりするときに自己の領域の主張を行うことを縄張り意識と呼ぶ。これらの定義を通じて、本稿では縄張り意識を「共有地や公共財に対して、あたかも所有権を有するかのよう、主張、行動すること」と定義する。

コモンズに対する所有意識が生まれることで、自分の所有するコモンズを大切に管理しようという気持ちが生まれる。これにより、コモンズの悲劇・過剰利用が防げるようになる。

しかし、縄張り意識のみではコモンズの悲劇を解消できない。それは以下

の2つの点が原因である。第一に、縄張り意識が他のプレイヤーの縄張り意識と衝突した場合に、コモンズから本来得られるはずだった便益を失ったり、それを解決するためのコストが必要以上にかかってしまったりしてしまう恐れがある点。第二に、共有地の所有権の付与が集団などの複合体に対して行われた場合、縄張り意識だけでは集団内部で発生するコモンズの悲劇を解消することはできない点。これらを解消する要素として次に挙げるコミュニティという概念が重要となる。

第二のレバーは「コミュニティ」である。コミュニティには、おもに2つの機能がある。一つ目が、縄張り意識を主張しあう主体同士をお互いに結びつけ合うことでスムーズな権利調整を可能にすること。二つ目が縄張りを持つ主体内部での、構成員によるコモンズの共同利用における相互義務契約を結んでルールを形成し、行動の相互監視などを行うことである。これら2つは先に挙げた縄張り意識持つ問題点を解消しうる機能である。

サーフィンの事例においては、ショップを中心に顧客がつながってできた顧客コミュニティ、そしてさらにそのコミュニティ同士がつながってできた地域コミュニティとコミュニティは2層構造を成している。それらが異なる次元で機能しあうことにより、円滑な公共財分配を可能にしているのだ。

ショップに基づく顧客コミュニティがお互いに結びついて、彼らはお互いの縄張りを認識し、保証し、それによって自身の縄張りも保証されている。つまり、お互いの存在によって自身の縄張りの正当性が保たれているのだ。このことから、縄張りとは顧客コミュニティ同士の相互依存によって成り立つものだと言える。

第三のレバーは「制裁」である。縄張り意識同様に、コミュニティ自体もカバーしきれない不安要素を抱えている。それは、たとえルールの形成や相互監視を行ったとしても、外部からのフリーライダーや、内部の違反者によってルールが破られてしまう可能性があることである。彼らの存在によって、コモンズの悲劇はいとも簡単に引き起こされてしまう。それを避けるためにコミュニティはそれぞれに対して制裁機能を持たなければならない。

制裁とは法律や規則、また慣習や伝統などの社会的規範に背いた者に対し

て加えられる懲らしめや処罰のことである⁶。

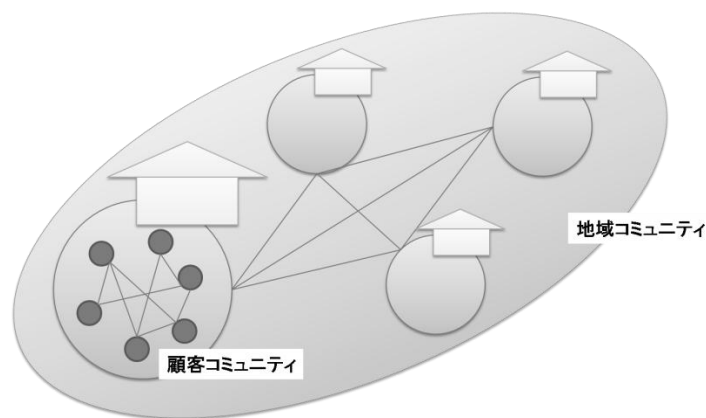
上記3つのレバーすべてが、サーファーコミュニティにおけるコモンズの管理・維持、そして分配において必要不可欠な要素であり、コモンズの悲劇を回避するには重要である。次章では、これら3つのレバーが現実になどのように働き、サーファー達によりどのように維持されているかを、ルールや慣習に着目しながら描いていく。

5. 事例分析

5.1. サーファーコミュニティの特徴と維持・拡大

サーファーコミュニティはショップを中心にその顧客同士がつながった顧客コミュニティとそのコミュニティ同士がつながった地域コミュニティの2層構造を持っている。(図1)。

図1：サーファーコミュニティの2層構造



我々は湘南鵠沼海岸・千葉北でのインタビュー調査を通してこのようなコミュニティ構造が作られ、維持される理由を探った。その結果、コミュニティ形成における制度、コミュニティへの参加とネットワーキング、コミュニティの象徴の3つの相互作用を通して成されることが解った。

⁶ 例えば、政治世界に見られる経済制裁のように、ある集団の合意形成に反する行動を取ったものに対して加えられる罰がそれにあたる。

5.1.1. コミュニティ形成における制度

NSA（日本サーフィン連盟）は、正会員⁷に登録しようとする者はチーム⁸に所属することが必要であること。新しいチームを組織する際には5人チーム員を集め、さらにNSA各支部長⁹の許可が必要であること。の2つのルールを定めている。一見すると、お店を介さずに仲間を5人集めることができれば自分達だけのチームを組織することができるために、前述のようなショップを中心とした顧客コミュニティは組織されないようにも思える。しかしながら、千葉北サーファーのAさんはこの制度によって自分達だけのチームが組織されず、ショップ中心のコミュニティが組織されていることを主張する。

実際に5人集めて新しいチームを作るのはすごく大変です。まずサーフィンは個人のスポーツなのでお店を介さずに5人を集めるのもなかなか難しいはずです。そして実はチームって作ってそのまま放置しておけるわけではなくて、支部予選の時にはチームから人手を出して手伝いをしなければならなかったり色々大変なんですよ。作る際に支部長の許可が必要ですからね、もちろん強制ではないですが支部の行事には参加しなくてはなりません。それを考えると自分達で新しいチームを組織することは敷居が高いですよ。だからこれからチームに入ろうとする人は既存のお店のチームに入ろうとすると思います。

（千葉北サーファーAさん）

NSAの定めるルールによって、個人がチームを組織することに対する敷居が高くなり、結果既にあるショップを中心としたコミュニティに参加することになる。ショップを中心とした顧客コミュニティが組織される前提にはこ

⁷ NSA主催の大会への出場やサーフィン検定受検のためには正会員への登録が必要である。

⁸ 本稿ではNSAに登録のあるサーファー集団を特にチームと呼び、登録のない人々も含むコミュニティと区別する。

⁹ NSAはそれぞれの地域毎に支部を設けており支部長はその地域のチームリーダーの中から選出される。

のルールが機能していた。

5.1.2. コミュニティへの参加とネットワーキング

前述したルールの下でショップを中心とした顧客コミュニティが組織されることがわかってきたが、実際にはチームに入ろうとしてコミュニティに参加するケースはあまりないようである。コミュニティへの参加は製品購入をきっかけとし、ショップの人と親しくなることで参加するケースと、既にコミュニティに参加している人に紹介されてその一員になるケースの2通りが一般的な様だ。ここで、それぞれのケースでコミュニティに参加した湘南サーファーのBさん、千葉北サーファーのCさんの話を聞こう。

私がこのコミュニティに参加したきっかけは、道具を全てここで購入したことです。サーフィンを始めたかったんですが、どうしたら良いかわかりませんでした。せっかくなら湘南のお店で始めようと思って道具を買いに行ったのですが、サーフィンって色々ルールが難しくて分かりにくいってことを知りました、しかも知らないで行くとトラブルを起こすこともあるって聞いたんです。でも、このお店で道具を買って、お店のステッカーつけていたらまず大丈夫だって言われたし、なにかトラブルに巻き込まれてもお店の縄張りでサーフィンしている分には守ってくれるってことだったんでそれで、ここでお世話になろうって決めました。実際にお店のステッカーを付けているとなんとかサーフィンをしていても安心できるので、ここで道具を購入して正解でした。

(湘南サーファーBさん)

僕は友人に誘われてサーフィンを始めたんですね。なかなかサーフィンで一人では行きにくいですから。それで友人とサーフィンに通っているうちに友人のチームの先輩にサーフィンを教えてもらうようになりました。だんだんサーフィンが楽しくなってきたころにその先輩から「今度お店に来たら？」と誘われて行ったのがきっかけでしたね。

(千葉北サーファーCさん)

サーフィンを始める際に、NSA の存在を知り、かつその正会員になろうとする者は少ない。彼らはショップでの製品購入や既存のコミュニティメンバーからの紹介を通して、NSA の正会員に登録したいと思わなくとも、ショップ中心のコミュニティに参加し、そのメンバーとしてこれからのサーファー人生を送っていくこととなるのである。

ここまでのルール、参加方法の記述においては、顧客がショップや自分を紹介してくれる一部の既存顧客とのつながりを作るメカニズムを明らかにしてきた。しかしながら、このままではショップを中心に顧客同士がつながる顧客コミュニティが形成されることまで示すことができない。ここからはコミュニティメンバーのコミュニティへネットワーキングの様子を描くことで、顧客コミュニティの形成理由を示す。

晴れてコミュニティメンバーの一員になった顧客は、買うものがなくてもショップに顔を出す。自身の最近の上達具合や道具の良し悪し、さらには他の人の様子などを話すためだ。長い人だと一時間以上、少なくとも十五分前後はショップに滞在する。このために狭いショップの中にも折りたたみの椅子があり、じっくりと話ができる設備が整っている。この十五分～一時間の間に他の顧客が来れば、ショップは彼らを紹介し合いコミュニティメンバーをつなげてしまう。また、ここで話されている情報は顧客の様子をショップ側がモニタリングする上でも非常に重要である。詳しくは後述するが、例えばマナーの悪いものがいた場合、たとえショップの人が海に入っていないなくても顧客の話からいち早くその情報を得ることで対処が可能になるし、もし誰かが上手くなった情報を得ることができれば、次にその顧客がショップに来た時に褒めることができるのである。ここで実際にサーファーがショップでどのような会話をしているのかについて、千葉北サーファーの C さんの話を、ショップ側がどのようにそれを捉えているのかについて千葉北でサーフショップを営む I さんの話をそれぞれ聞く。

始めたてのころにお店に行くと、毎回と言っていいほど違うお客さんがいて、初心者の僕は緊張しましたよ。でも、お店の人が必ずと言

っていいほど知らない人のことを紹介してくれるので、店に行くたびに知り合いが増えたのは心強かったです。実際にお店で会った人と海で会うこともありましたし、海に行くのも自然と楽しくなりましたよ。みなさん声をかけてくれたり、次回から一緒に海に行く約束したりしてくれるんです。いろいろな人がいますけど、お店を通して知り合った人は仲間意識が強いですね。

(千葉北サーファーCさん)

サーフショップっていうのは人とのつながりで商売しているようなものなんです。お店に来ているお客さんと誰々が最近上達しているとか、誰々が最近海に来ていないなんて話は沢山しますね。そういう積み重ねがいざ彼らがお店に来た時に「最近頑張ってるらしいじゃん」の一言になるんですよ。折角頑張っているんですから上達して褒められたら嬉しいですよ。逆にスポーツですから、壁にぶつかって行きたくないな一っていう時だってあるんです。でも僕らはそういう子たちを見捨てませんよ。頑張りたいって気持ちがあれば引っ張って行っても上達させてあげたいって思ってやってます。そういう一つ一つがお客さんに伝わっているから、ウチのお店に皆さんが来てくれるのだと思ってるんですよ。

(千葉北サーフショップオーナーIさん)

ルール、参加とネットワーキングの2つの視点からコミュニティを探ってきたことで、ショップ中心の顧客コミュニティが形成される様子が見えてきた。そして、これらの顧客コミュニティはそれぞれのショップに組織され、地域としては複数、ショップ中心の顧客コミュニティが存在することになる。

5.1.3. コミュニティの象徴

地域に複数存在することになったショップ中心の顧客コミュニティはそれぞれにその象徴を表すことで一体感を高め、同時にお互いがお互いを認識する。その象徴については一般的にはショップのロゴマークのステッカーで

ある場合が多い。(その他に単一ブランドの製品を使うこと、オリジナルのジッパーストラップも見受けられた)彼らはそのステッカーを自分のサーフボードや、車に貼りつける。千葉北サーファーDさんの話にはその様子が良く表れていた。

毎日の様にサーフィンしに行くから、いちいち連絡するのは面倒くさいんですよ。車にステッカーが貼ってあると、一緒に行かなくても知り合いが海に入っているのがわかるのが良いですね。単純に同じステッカーを張っていれば仲間意識も湧きますし。あと、例えば逆に入る前に他のチームが入ってるのがわかるから、そうしたらそこは避けたりもしますね。

(千葉北サーファーDさん)

このようにコミュニティの象徴は仲間を見分けるだけでなく、地域の他のコミュニティメンバーを見分けることにも役に立っている。そうしてお互いに認識したコミュニティは一定期間に合同でイベントを開くことなどで行なわり、サーファーコミュニティの2層構造を作りだす。2009年の8月に合同でバーベキューを行った千葉北のサーファーAさんにそのお話を聞いた。

毎年1度、地域内の他のチームと交流会を開いています。普段から海でお互いに存在は見ていますが、なかなか話をする機会は少ないですからね。でも、お互いに敵対するのではなくて友好的な関係を築いていくことが僕たちにとってもサーフィンしやすい環境を作ることになると思うんですよ。だから今回は僕の方から向こうに掛け合って、バーベキューを企画しました。全部で34人が集まってくれましたよ。

(千葉北サーファーAさん)

以上のように、サーファーコミュニティがショップ中心の顧客コミュニティとそのコミュニティ同士がつながった地域コミュニティの2層構造をな

しているのは、ルール、参加とネットワーキング、象徴の3つの要素が相互にかみ合っているからであった。そしてこのコミュニティこそが縄張り意識の順機能を顕在化させる1つのレバーになるのである。

5.2. 縄張り意識の生成・正当性

サーファーにとっての縄張り意識とは何か。それは、地元のサーファーコミュニティが、ある場所において波の分配を優先される存在として自身を認識し、愛着をもってその場所を管理しようとする意識である。そのような意識の働く場所をサーファーはローカルポイントと呼ぶ。この節では、そのような縄張り意識がどのように生成されるのか、またなぜそのような縄張り意識を持つことが認められるのかについて述べていく。

5.2.1. 縄張り意識の生成

ショップ中心の顧客コミュニティに属するサーファーは多くの場合、そのショップのローカルポイントへ通いサーフィンをする。初心者サーファーにとってはそうすることで前述したようにトラブルを回避する利点があるし、また中・上級者サーファーにとっては後述になるが波を優先的に得ることができるという利点があるのである。その結果としてショップで出会った仲間と海で会うことが実現する。ここでローカルポイントについてサーファーの話を聞こう。

波がない時もあるので毎回って訳ではないのですが、なるべくならホームポイント¹⁰の海に入りたいですね。とりあえずそこに行けば誰かしらが海に入っているだろうし、もし入っていなくても誰かが後から来るんですよ。実はサーフィンってなかなか満足のいく波の時間が少ないのですが、波が良くなくても仲間と話してれば楽しめますし、最悪仲間が集まればバーベキューでもしながら波がでるのを待ってるなんてこともあります。

(湘南サーファーEさん)

¹⁰ ローカルポイントを内側から見た場合の呼び方。

このように不確実性の高いスポーツであるサーフィンをする者にとって、仲間がいる海というのは、万が一、波がなくても自分達の楽しみを維持するために非常に重要なものなのである。常に自分が行く海があり、そこで迎えてくれる仲間がいる。それがサーファーとしてのひとつの楽しみであり、ローカルポイントに対する愛着である縄張り意識を生成していく。

5.2.2. 縄張り意識が認められる理由

縄張り意識が認められる理由は大きく分けて2つある。一方は、コモンズである海の管理と美化による貢献に対する権利の付与であり、他方は、他コミュニティの縄張り意識を認めることによるそれぞれの相互依存性という性質の結果である。前者に関しては、海岸の共同管理に関して述べたように、日頃のビーチクリーンや海の利用の管理などの貢献に対する見返りという意味である。サーファーは縄張り意識を持つことで、自身のローカルポイントにおいて強い愛着を持ち、それがそのサーフスポットの環境保全につながる。鵜沼海岸のサーフショップ、コーストラインの小田さんはこう語る。

権利と義務って表裏一体だと思うんですよ。サーファーって縄張りとかあって、やくざな世界だと思われているかもしれないですけど、決してそうじゃないんですよ。きれいな海って言うのは実はサーファーによって守られているのです。ローカルたちが、ビーチクリーンをするからきれいに保たれていて、その対価としてローカル¹¹たちはその海で優先的にサーフィンする権利を得ているんですよ。なんにもせず、ここは俺たちの海だって言い張るのは筋違いだと思いますけど、ローカリズムって言うのはその海を大切にしているサーファーたちへのリスペクトなんですよ

(コーストライン小田さん)

後者の、他コミュニティの縄張り意識を認めることによるそれぞれの相互依存性とは、相手の権利を認めることで自身の権利の主張に対する正当性を担保するという意味である。稚拙な表現ではあるが、つまり、「そっちに行かないか

¹¹ その場所がホームポイントである人々のこと。

ら、こっちには来るなよ」、「そこはお前の場所と認めてやるから、ここは俺の場所と認めてくれよ」という相互関係を指す。サブコミュニティである顧客コミュニティ同士のネットワークによって生まれる地域コミュニティの間で、このような暗黙の取り決めが行われているのである。

5.3. 縄張り意識とコミュニティによる共同管理と共同分配

これまで、サーファーコミュニティ特徴と維持・拡大について述べ、さらにどのようにサーファーたちが海に対して縄張り意識を持ち、それを相互に認め合っているか述べてきた。その縄張り意識とコミュニティがいかにしてコモンズである海において共有資源の共同分配を実現し、そして環境保全を実践しているかについて具体的例やインタビューの結果を交えながら説明していきたい。

5.3.1. 海岸の共同管理

先の章で説明したように、ローカルポイントを中心として集まってくる同じ顧客コミュニティの仲間たちは、コモンズである海に対し愛着をもち、ホームポイントとしてより良い環境を作るために働く。これは、パークス(1985)の唱える私有化制度にまさしく則した行動といえる。

ホームポイントはすごく大切にしますよ。例えばゴミゼロ運動の日、僕たちは海に行って海岸清掃をするんです。もちろんそれだけではなくて自分達も普段からゴミのポイ捨ては絶対にしないし、他の土地から来た方にもさせないように目を光らせています。例えば煙草の吸殻とか誰も言わないと結構捨ててしまう人がいますよね。そういうのを見つけたらしっかり注意するように心がけています。

あとはサーフィンって車で来る方が多いので駐車場問題で結構住民から苦情が来てしまいます。それで最悪の場合、行政によって全く駐車できないように海の入口が閉められてしまうこともあるんですね。だからそうならないように自分達はしっかりとお店の駐車場にとめます。しっかり管理していると行政も動いてくれるので、駐車場を作ってくれた

こともありましたね。

(湘南サーファーEさん)

彼らはただ単にその土地に対して愛着を持ち、ビーチクリーンを行うだけでなく、いかにしてその土地でサーフィンしやすい環境を守っていけるかを大切に考えている。住民の好意による私有道路での駐車などにおいても、ビジター¹²が間違った行動を取れば注意する。それは、ホームポイントへの愛着から生まれる、そのポイントでサーフィンできる環境を守ろうという気持ちに基づくものと思われる。

5.3.2. 波の共同分配

コモンズである海岸をコミュニティで管理するだけではなく、彼らはサーファーにとって有限な共有資源である波に関しても独自の分配のルールを作りだしている。サーフィンの基本としてワンマン・ワンウェーブというルールがある。これは言葉の通り、一つの波に一人しか乗ってはいけないことを表しているが、これはサーフィンというスポーツを楽しむための最低限のルールである。サーフィンとは一本の波を右から左へ、もしくは左から右へ乗っていく中での動きを楽しむスポーツであり、二人以上が同時に乗ると過剰利用となり、その価値は享受出来なくなってしまう。

ワンマン・ワンウェーブというルールがあります。先に誰かが乗っている波はその人のものなので、基本的に後から手をつけませんね。もし二人以上が同時に波に乗ろうとした場合もピーク¹³に近いほうの人に優先権があるので、他の人はプルアウト¹⁴します。だから、多くの人が一斉に波のピークに近い場所に向かってパドリング¹⁵し始めるのですが、これが全く知らない人同士だと結構難しいもので、一本の波に大人数が

¹² その場所をホームポイントとしないサーファーのこと。よそもの。

¹³ 波が一番始めに崩れる部分のこと。

¹⁴ 乗った波の外側に出ること。ここでは他の人が優先権を持つ人に波を譲るという意味。

¹⁵ ボードに腹ばいになって水をかくこと。ここでは移動するという意味。

集まってしまう。これが、お互いにぶつかったりするトラブルにつながったり、乗れなかった場合には無駄に体力を消耗してしまうので、出来るだけ避けたいものなのです。でも同じコミュニティのメンバー同士でしたら、お互いの力量も分かっていますし、相手を尊重する気持ちもあるので非常にスムーズですね。仲間の近くに波が来たら素直に譲りますし、例え自分のところに波が来ても自分ばかり乗らずに、初心者メンバーに譲るようにしています。

(千葉北サーファーDさん)

千葉北のサーファーが語るように、大前提のルールに基づきつつも、コミュニティ独自の波の分配の慣行が存在するのである。コミュニティメンバーで、お互いの力量や、波に乗った本数の比較などを考慮して多少の波の譲り合いを生むことで、一斉に一本の波に人が群がり誰も乗れないという事態を解消している。

さらには、場所によっては、ボードの種類や巧拙で入れる海を分けている場所もある。ロングボード¹⁶は禁止だったり、逆にショートボードは禁止だったりする。これらのルールは、そのエリアをローカルポイントとする顧客コミュニティが、波の質や、混雑から考えて独自に設定していることが多い。実際に、千葉のサーファーに聞いてみると、

ここの志田下（千葉県一宮町）っていうポイントは、基本的にロングボードでのサーフィン禁止です。もちろん、これは行政が決めていることではありません。地元のローカルコミュニティを中心に、「暗黙のルール」として守られていることなのです。本来であれば、みんなの公共の海に勝手に強制力を持ったルールを作ることは変だと思うのですが、サーフィンというスポーツをみんなが楽しむためには仕方がないことなんですよね。

(千葉サーファーFさん)

¹⁶ サーフボードには長さの違いでロングボードとショートボードがあり、それぞれに特性が異なるために同じ場所に入るとトラブルになるケースがある。

このようにコミュニティは、本来であれば所有権のない海に対して、独特のルールを設け、サーフィンにおける利欲の衝突を避けながら、楽しむためのルールを設定している。これは、常識的観点からすると非常に違和感がある事実かもしれないが、上でサーファーが語るように、サーフィンというスポーツの特質上、必要不可欠のことである。

上記のような、波の分配に加え、顧客コミュニティの集合体である地域コミュニティでは、顧客コミュニティ間での波の分配の様子も見るができる。ある顧客コミュニティのローカルポイントでは同じ地域コミュニティに属する顧客コミュニティであったとしてもビジターとなる。著者が実際に、友人に連れられて、千葉県銚子市の飯岡エリアにサーフィンに行った際にも不思議な体験をした。

友人とその日のサーフスポットを探して、車で海岸線を十五分程の距離を走っていた時だった。ビーチには、普段都内ではあまり見かけない車種の車が大量に停まっており、ほとんどがサーフボードを積んだ車であったり、サーフショップのステッカーを貼った車であった。すると、友人は「今日は、ローカルの人たちが多くみたいだからもう少し南まで下ろう」と言った。友人はこのエリアでの力関係をよく把握しており、車に貼ってあるステッカーや、海に入っているサーファーのウェットスーツのブランドをチェックすることで、ローカルが多い日には、その海に入ることを避けているらしい。

(2009 年 7 月 30 日)

サーファーたちはローカルが多い海に入ることを極力避けており、それが顧客コミュニティ間での波の分配に繋がっている。

以上が縄張り意識とコミュニティの 2 つのレバーによる波の分配機能である。このような慣習をサーファーはローカリズムと呼び、コミュニティ間で暗黙のうちに共有し伝播している。

しかし、これらのルールも、いくら勝手に制定したところで守らない者が

出てくれば、その強制力を失い、直ちにその海におけるコモンズの悲劇は避けられないものになってくる。

5.4. 制裁

5.4.1. 顧客コミュニティにおける制裁機能

サーファーたちは、独自の暗黙のルールに従い、波の分配を行っていることがわかった。しかし、これらのルールが必ずしも守られるとは限らず、どこの世界にでもいるような「ならず者」によって、その秩序が崩されてしまうかもしれない。コミュニティの誰かがルールを破り、自分だけが楽しめるような波乗りをすれば、コミュニティメンバー同士の信頼関係は失われ、それぞれが利己主義的に波に乗り始めるであろう。サーファーコミュニティは、このような裏切り、もしくは「フリーライダー」に対して行動を規制するための制裁機能を有する。

いくらコミュニティの仲間でも好き放題やってたいら駄目ですね。以前若い子達が友達を連れて6人位で海に入ってきたことがありました。6人で入ってくること自体は問題ありません。皆でサーフィンした方が楽しいことも僕らは知っていますし、そこには文句は言わないのですが、彼らはあたかも自分達だけの海のように振舞っていました。大声で叫んでいたり、自分達の間だけで波を独占したり。僕らはローカルとして他の土地から来た人達には優先してもらっているけど、基本的には海はみんなのものだってことを忘れてはいけません。それを忘れるとその海自体の評判が落ちてしまいますから。だから、僕はその6人を一度海からあがらせて言いましたよ。ここはお前らだけの海じゃないのだから我が物顔でサーフィンするなと。実は今ではその子達とも知り合いになって海であったら話すような関係になりました。サーフィンってそういう人としての礼儀みたいなものを学ぶことも魅力の一つだと思います。

(湘南サーファーGさん)

自己の利益ばかりを優先するものはその場で、海から上がらされたり、最悪のケースでは平手打ちが飛んでくることがある。逆に、軽いマナー違反などは、注意されないまでも周囲から白い目で見られたりする。また、その場では注意されなくとも、後日コミュニティのメンバーを伝って、間接的に叱りを受けることもある。ここから、先に述べたようにショップを中心としたコミュニティがあるからこそ、制裁が機能することがうかがえる。要するに、コミュニティによって、縄張りの中で生まれた分配や共有のルールは、このような制裁機能によって守られているのである。

5.4.2. 地域コミュニティにおける制裁機能

前節では、分配や共有のルールを守るための、顧客コミュニティ内部での制裁機能に関して述べた。しかし、海にはコミュニティ内部でのならず者に限らず、違うコミュニティからやってくるフリーライダーともいえるサーファーがやってくることがある。その場合でも、彼らは独特の制裁機能を使って、ローカリズムやそれに伴う分配・共有のルールを守る。湘南にホームポイントを置く、ある、元プロサーファーの A さんはこのように話していた。

この前、湘南の海にサーフィンしに行ったときのこともんだけど。友達と 2 人で海に入っていたんだよね。そしたら、いきなり違うコミュニティのやつが、一緒に行った友達が乗っている波に前乗り¹⁷してきた上に、文句付けてきたんだよ。自分たちは、ルール守っていたから、怒られる筋合いなんか何にもなかったんだけど。ウェットスーツとボード見たら近くのショップのコミュニティのやつだってわかって、海から上がったあとに、そのショップのオーナーに会いに行ってその時の状況を話して文句言ったんだよね。そうしたら、後日その問題起こしたやつが直接俺達に謝りに来たよ。いや、もちろんその場でそいつを叱りつけても良かったんだけど、きっと喧嘩になっちゃうじゃん。そしたら、うちの店にも、あっちのお店にも迷惑かけちゃうなと思って。

¹⁷ 優先権を無視してその人の前から波に乗る行為。サーフィンにおけるマナー違反。

(元プロサーファーAさん)

このように、たとえ違うコミュニティの人間であっても、ルールを守らない、もしくはローカルを尊重しないといったフリーライドは許されない。コミュニティの維持・拡大の章でも述べたように、このようなコミュニティ同士のつながりは、平素からのバーベキューや横のつながりを大切にする取り組みから維持される。このような横のつながりの上に成り立つ制裁機能によって、顧客コミュニティは外部からのフリーライドを排除し、共同管理と共同分配の仕組みを維持しているのである。

以上述べてきたように、コモンズの共同利用は、縄張り意識とコミュニティの2つのレバーによる共同分配と共同管理の仕組みによってのみ成り立つのではなく、制裁というもう1つのレバーによってそれらの含有するリスクを担保できてこそ成り立つのである。

6. 結語

6.1. 考察

以上のように、サーファーコミュニティにおいては縄張り意識、コミュニティ、制裁機能の3つのレバーが従属的なレイヤーのもとに、効果を発揮することによって、共有地である海や海岸の環境が保全され、さらには共有資源である波が効果的に分配されている。これら3つのレバーの利点を下にまとめる。

第一に、コモンズの悲劇の回避が挙げられる。サーファーの事例で一貫して述べていたように、これら3つのレバーがそれぞれを従属的に補完することによって、本来であれば責任の所在が不明確な海岸のゴミ問題や、無秩序な波の分配によって起きる過剰利用などから起こる、コモンズの悲劇を解消している。

第二に、新たな価値の創出がなされる点である。先に述べたコモンズの悲劇の解消とは、外部性と過剰利用から起きる機会損失のリスクを回避することであったが、これら3つのレバーはそれ以外の価値も創出している。例えば、今回の湘南・鵠沼海岸の事例に見られるように、縄張り意識とコミュニ

ティによって、継続的かつ同じ場所に人が集まることで、地域全体が活性化することが挙げられる。共有地の私有化を通し、その土地に愛着を持つこと、そしてコミュニティという集団が継続的にその場所に集まる特性は地域の活性化に何らかの寄与があることがわかった。

第三に、汎用性の高さである。今回あげた3つのレバーは、コモンズの悲劇の回避、つまり共有地や公共財の管理において他の事例にも転用できる可能性を含む。また、実際に同じ3つのレバーに当てはまる原理を用いて、共有地の管理を行っている事例がある。例えば、浦和レッズのサポーター集団¹⁸もその一つの例である。

6.2. インプリケーションと今後の研究課題

コモンズの悲劇を回避するためには、縄張り意識、コミュニティ、制裁の3つのレバーに着目する必要がある。

これら3つのレバーは汎用的なものであるが、それぞれに暗黙的な慣習や制度に埋め込まれ、複合的に結びついていなくては機能しないことを忘れてはならない。前述の通り、前提としての縄張り意識にはポジティブな働きとネガティブな働きがある。それを支える2つのレバーに関してはその働きが縄張り意識と連動することを熟考する必要がある。

今回のサーファーコミュニティのケースは、ほとんどの意思決定がコミュニティと呼ばれる集団の内部や、もしくはそのコミュニティ同士のやり取りの中で、暗黙的かつ、自然発生的に行われたものであるため、3つのレバーがコントローラブルなものだとはまだ十分に言えない。そのため、今後はこれら3つのレバーに関わる、暗黙的かつ、自然発生的な意思決定のメカニズムを、様々なケースの調査を通してより鮮明にしていくことが課題になると思われる。

¹⁸ 井上(2008)によるレッズサポーターの顧客コミュニティの研究。浦和レッズのサポーターコミュニティは、3名以上での新規登録をルールとすることで、効果的なコミュニティの発展と維持を実現している。これらのコミュニティも、サーファーコミュニティと同様に縄張り意識と制裁機能を有することで、共同分配・管理を実現している。

7. 参考文献・参考 URL

- 井上達彦(2008), 「顧客コミュニティにおける社会関係資本の構築」『早稲田商学』 416号, 1-48
- 上田良文(1999), 「コモンズ問題とグループアクション」『会計検査研究』 No. 20, 51-64.
- 名和小太郎(2004), 「コモンズの悲劇、反コモンズの悲劇」『情報管理』 Vol. 47(4), 286-288.
- 林薫平(2008), 「コモンズの利用権割当制度に関する考察」『農村計画学会誌』 Vol. 26(4), 416-426.
- 室田武、三俣学(2004), 『入会林野とコモンズ』 日本評論社.
- Hardin, Garret (1968). "The Tragedy of the Commons," *Science*, 162, 1243-48.
- Berkes, F (1985), "The common property resource problem and the creation of limited property rights." *Human Ecology* 13(2), 187-208.
- Ostrom, E. (1990), *Governing the Commons*. New York, NY; Cambridge University Press.
- 日本サーフィン連盟「正会員（競技登録者）」
(<http://www.nsa-surf.org/info/cmember.html>)、アクセス日時：2009年11月22日